

インクル

第20号

財団法人 共用品推進機構

〒101-0064
東京都千代田区猿樂町
2-5-4 OGAビル 2階

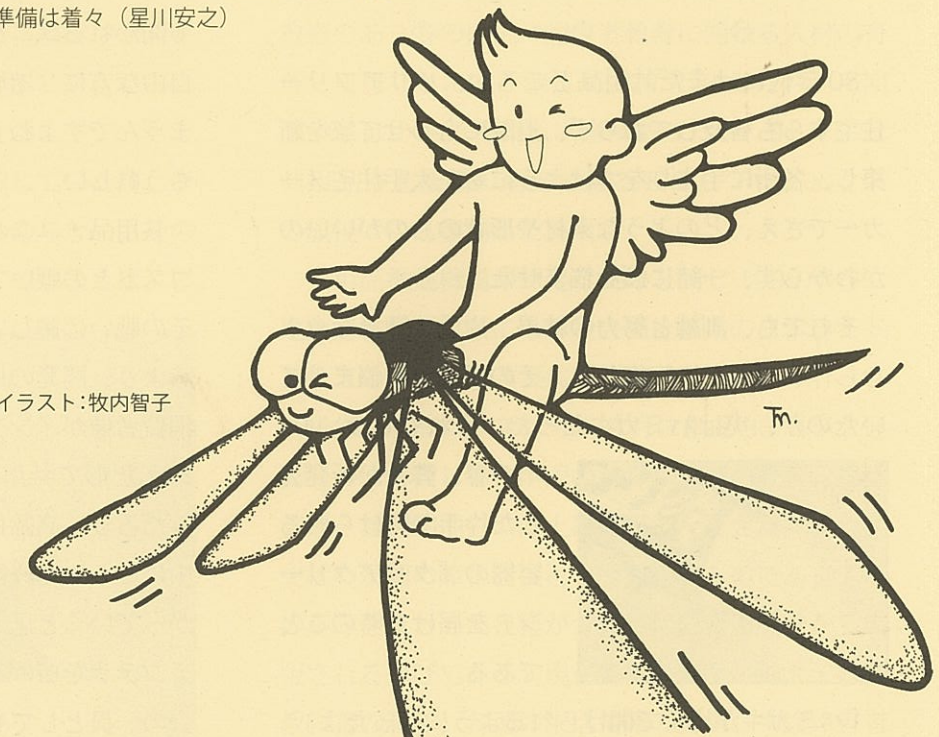
"Incl." by The Kyoyo-Hin Foundation

■「インクル」は共生社会の実現を願う妖精です。「包括的教育理念」を意味する英語「インクルージョン」から名付けました。

目次 / Contents

- **新連載** 随想 私と共用品 第1回 2
母が教えてくれた「できる喜び」(嶋田実名子)
- 誌上再録・法人賛助会員活動報告会・基調講演 3
共生社会に貢献する共用品の役割(木塚泰弘、大宅映子)
- <この業界・この団体> (社)日本自動車工業会 6
バスから軽、小型車まで「福祉車輛」の普及めざす(高嶋健夫)
- 特集:国際福祉機器展の共用品推進機構ブース 7
「配慮点」が一目でわかる展示に!(橋本英和、高嶋健夫)
- 「第4回西日本国際福祉機器展」に2年連続で出展(高嶋健夫) 10
- キーワードで考える共用品講座 11
第20講 共用品の市場規模——ミクロ的動向(後藤芳一)
- <ニュース&トピックス>
翻訳絵本『スーザンはね……』、評論社から刊行(森川美和) 12
国土交通省、ドラえもんが案内する交通バリアフリー(星川安之)
大活字、『ロービジョンのための生活便利帳』刊行(高嶋健夫) 13
「共用品ネット報告会:2002」を10月19日に開催(小塚通宏)
普及キャンペーン、第8弾はホテル、第9弾は車(森川美和) 14
- **新コラム** 共用品通信・情報アラカルト 15
- [事務局長だより] 16
韓国、岩手、大阪、東京 共用品展示会、準備は着々(星川安之)
- 奥付

イラスト:牧内智子



随想 第1回
私と共用品

母が教えてくれた「できる喜び」

花王(株)広報センター 社会関連グループ 社会・文化室長 嶋田 実名子

百の意見をきくより、体験してみると1回で理解できることがある。それが共用品や共用サービスであると思う。私にその入り口を開いてくれたのは、自分の母が脳梗塞により、左半身不随になるという不幸な事態に遭遇したからだった。

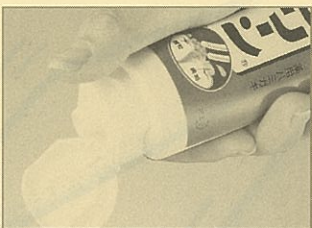
1984年のことである。それまで運動が大好きで、60代になっても縄跳びをしていた母が、突然倒れた。リハビリを経て、どうやら杖と特殊な補助具を着用すれば歩けるようになったが、半身は全く動かなかった。この母親の散歩に付き添うと、同じ町を歩いても今までは全く気づかなかった様々なことを発見できた。

道路の段差はもちろん、ほとんどの道路は端を歩くと水平ではなく、どちらかに片寄っているために、半身不自由な身には、とても歩きづらい。時間をかけて歩くのだが、すぐ疲れてしまう。休みやすみ歩くのに、道路の脇や店の前に置いてあるベンチがどんなにうれしかったことか。

美容室は段差で入るのが大変で、医院もスリッパを履き替えるところが多く、往生したものである。

80年代にはまだ共用品どころか、バリアフリー住宅すらも普及しておらず、退院に合わせて家を新築し、各所に手すりをつけようにも、大手住宅メーカーでさえ、どのような素材や形状のものがいいのかわからず、一緒に頭を悩ませた。

それでも、訓練と努力の結果、片手で簡単な食事なら作れるまでに回復した。その母が頭を悩ませていたのが、実はハミガキだった。忘れもしない94



年の春、弊社が新発売した片手で開けられる容器の「クリアクリーン」を届けた時のことである。

「ハミガキが片手で開けられるようになったよ」「あー、よかった。これで人に頼まなくても、い

つでも歯を磨くことができるわ」

決してCMの一節ではない。それまで、母はどうしても自分でハミガキの容器を開けることができなかった。麻痺の



ある方の脇の下に挟んで、動く方の手でキャップを開けようとしても、バタリと容器ごと落ちてしまう。いすに座って両膝に挟んで開けようとする、中身が圧力でグニュリと出てしまう。

年を取るとは、できることを1つひとつ失っていくことかもしれない。歯を磨く、顔を洗う。そんな些細なことでも、人の手を借りずにできることが増えると、どんなに喜びになるか。毎日のように使う日用品であるからこそ、共用品・ユニバーサルデザインの思想が大切なのだ、改めて実感した。

誰でも使う日用品だからこそ、使い勝手の良いもの、片手でも使えるものをめざすことが、不便さを抱える多くの人々にとって大きな支えになる。各地で開かれるユニバーサルデザイン展などで、体の不自由な方に「結局、花王さんのものが多くなってしまふんですね」と声をかけていただくと、何よりもうれしい。

共用品・ユニバーサルデザインは、ある意味では、コストとの戦いである。廉価な日用品であればこそ、その戦いは厳しいものになる。今ある商品を改善するより、開発の最初から、開発者の頭の中に様々な消費者像がインプットされていれば、よりコストを抑えた形で共用品の思想がモノづくりに活かされるだろう。高齢化が進むにつれて、どれだけ企業の中にこうした経験知があるかが、企業の強みにつながっていくと思う。これからは、意識してそうしたアンテナを広げることが、企業人として、また、社会の一員としても求められるのではないだろうか。

(題字は中野奈津美・共用品推進機構運営委員)

誌上
再録

法人賛助会員活動報告会・基調講演

共生社会に貢献する共用品の役割

去る7月15日に東京・六本木の国際文化会館で「第3回共用品推進機構法人賛助会員活動報告会」が関係者100人以上が出席して開催された。今回は、機構理事を務める木塚泰弘・静岡文化芸術大学教授／(福)日本ライトハウス理事長、同じく評議員を務める評論家の大宅映子さんが、それぞれ「ユーザーとして共用品・共用サービスを考える」、「共用品・共用サービスが社会に果たす役割について」と題して基調講演を行った。出席者に好評を博したその要旨を、以下に誌上再録する。

(構成・文責 高嶋 健夫)

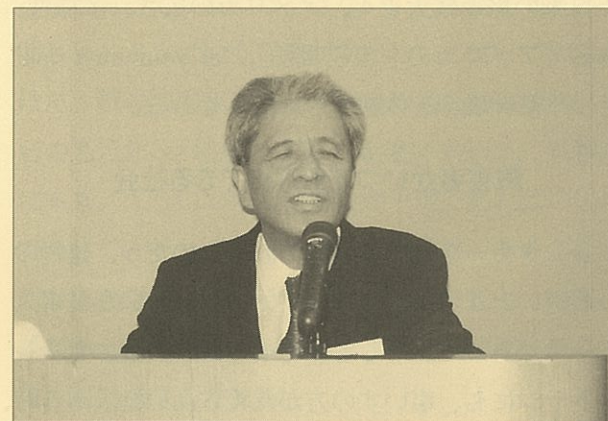
【基調講演①】
ユーザーとして
共用品・共用サービスを考える

木塚泰弘・(財)共用品推進機構理事

私は今年6月で、中途失明50周年を迎えた。戦後の栄養事情の悪い中で、勉学に、スポーツにと張り切りすぎたのか、結核性の病を得て、眼底出血によって次第に視力を失い、さらには2年間の寝たきりの療養生活を余儀なくされた。

振り返って、私は人生で2度、死線をさまよったことがある。1度目は敗戦の時。私は当時、満州(現中国東北部)の長春にいたのだが、死体がゴロゴロと転がり、ソ連軍の流れ弾にいつ当たるかわからない切迫した状況で家族と共に過ごし、1年後によく内地に引き揚げる事ができた。帰国できた時には、「生きていることの喜び」を小学生ながらに実感したものである。

2度目が失明し、寝たきりで療養していた時。なにしろ結核性なので、いつ死ぬかわからない。その時に「見えないことは辛い、死んでしまえば、ど



■ユーモアたっぷりに語る木塚泰弘理事

のみち見たいものも見えなくなる。死ぬことに比べれば、見えないことなど大したことはない。どう生きるかが大切だ」と考えるに至った。

それからは、まず立ち上がる、少し歩く、もっと長く歩く、といった具合に毎日少しずつリハビリを重ねていった。私にとっては、最も充実した人生の充電期間だったと思う。

日本ライトハウスで「便利グッズサロン」を開設

その後、私は現在の筑波大学付属盲学校を出て、早稲田大学で近代史を専攻。卒業後は都立久我山盲学校で英語教師を約10年間務めた。そして72年、神奈川県横須賀市に新設された国立特殊教育総合研究所に当時最も若い研究員として入所し、障害者教育のあり方の研究や障害者教育に関わる人材の育成・研修などに取り組んだ。27年3カ月の勤務期間中にはいろいろな出来事があったが、91年には共用品推進機構の前身であるE&Cプロジェクトの旗揚げにも参加した。

共用品推進機構が発足したのと同じ1999年春に定年退官し、大阪にある社会福祉法人の日本ライトハウスの第4代理事長に就任した。

日本ライトハウスは今年9月に創立80周年を迎えるが、一貫してわが国の視覚障害者の教育、生活支援、社会的地位の向上に取り組んできた。その歴史はわが国の障害者福祉の歴史そのものであり、その歩みをまとめた書籍が今秋には教育出版社から出版される運びである。現在では、点字・拡大・録音教科書の制作、各種の生活情報の提供、中途障害者の生活・職業訓練、盲導犬の育成など、様々なサー

ビスを提供している。

理事長就任後、私は社会的ニーズに応え、かつ効率的な経営を実現するために、若手スタッフによる「将来構想委員会」を立ち上げ、生活情報提供サービスの一環として、共用品や盲人用具に触れるサロンの開設を提案。イベントでの実験的な展示などを経て、2001年5月に「エンジョイ便利グッズサロン」として常設されるようになった。現在、ここでは糸通し器、計量カップなどから家電製品まで約400点の生活用品を展示しており、視覚障害者がいつでも実際に手に取り、購入することができる。

共用品で快適な单身ライフ

これと共に、2000年からは静岡県浜松市に新設された静岡文化芸術大学のデザイン学部生産造形学科にお招きを受け、機構理事長である鴨志田厚子^{かもしだあつこ}学科長のもとで、ユニバーサルデザイン／バリアフリーについて教えている。現代社会をバリアフリーの切り口からどう認識すればよいか、障害者・高齢者がどんな不便さを持ち、それをどう解決していけばいいのか、障害や加齢による感覚・運動機能の低下に対して、生理学的、心理学的な裏打ちや手だては何か、といった講義をしている。

ところで今、私は浜松には単身で赴任している。单身生活は実は2度目の経験なのだが、初めて住む町でもあり、生活は激変した。一人暮らしをするための生活用品を家内に来てもらってまずは買い求めた。以下、私の单身生活を少しレポートしよう。

まず入浴。お風呂はセンサー付きで、湯がいっぱいになると自動的に止まるようになっている。シャンプー、リンスはもちろん問題ない。洗濯機はちょうどドラムが斜めになった新製品が出た時で、早速これを購入した。確かに、底に落ちている小物も拾い損なうことがなく便利だ。洗剤はこぼさないように入れるのに苦労していたが、シート状に分けされた洗剤が出て便利になった。

料理にはガスは危ないので、電磁調理器をずっと愛用している。最近の電磁調理器は300度まで出るので、焼き物でも、炒め物でも大抵の調理には間に合うのでとても重宝している。

困ったのは、電気のコネクト。たこ足配線は安全面で問題があるので、スイッチ付きの6連のコネクトを使っているが、ラジカセや携帯電話などのアダプターを差し込むと大きすぎて、結局4つしか差し込めない。何とか改良してほしいものだ。

今一番ほしいのは、ニンニクの皮むき器だ。ニンニク料理が好きなので、よく皮むきをするのだが、これには苦労している。聞くと、専門の料理店でも手でむくしかないという。そこで、講義の際には、学生に「是非いいものを開発して」と訴えている。

【基調講演②】

共用品・共用サービスが社会に果たす役割について

大宅映子・(財)共用品推進機構評議員

私が共用品推進機構の評議員を引き受けた理由の1つは、私が関わっている東京ファッション協会が「クリエイション大賞」を1997年に、前身であるE&Cプロジェクトにお出したことから、鴨志田厚子さんとのお付き合いが始まり、財団化する際にお声をかけていただいた。「ISO/IECガイド71」の議長をされた菊地眞^{きくちまこと}理事（防衛医科大学教授）が昔のテニス仲間だったこともご縁になっている。

実は、共用品／バリアフリー／ユニバーサルデザインに関して、私が「そういうことか」と思った出来事がある。2人の娘がまだ中学生と小学生だった20年ほど前に、アメリカへ連れて行った時の体験である。私には、娘たちにアメリカ社会を見せたいという意図があった。私自身は昭和41（1965）年に夫と2人で初めてアメリカに行った。当時はまだ日米の格差は大きく、アメリカの広さ、多様性、そしてアメリカの「自己責任」、"at your own risk"という精神風土を体験できたからである。

障害者がいつでも外出できる社会

レンタカーを借りて各地を回ったのだが、建物の一番近いところに必ず車いすマークが付いた駐車スペースがあった。そして、町の中に、公園にも、レストランにも、車いすの方がたくさんいた。ある時、娘が「ママ、アメリカ人って、体の具合が悪い人が

多いの？」と聞いてきた。そのとき、私はきちんと返事ができなかった。

私たちは旅行中いつも、必要な物をキャスター付きの小さなバッグに入れて、下の子が引っ張って歩いていたのだが、アメリカではどこでも引くことができた。ところが、成田に帰って来たら、目の前に突然階段が現れたりして、途端にそのバッグを引っ張れなくなった。

そこで、娘がこう言った。「ママ、わかった。アメリカには体の悪い人が多いのではなくて、体の具合が悪くてもいつでも外に出られるように、町ができあがってるんだね」と。親としては、これだけでも連れて行った意味があったと感じたものである。

日本はと言うと、忘れもしない。その頃、日比谷公会堂に身体障害者用の車いす用の席ができた。ところが、ほとんど活用されなかった。すると、一部から「逆差別だ」という声が出てきた。八代英太^{やしろえいた}さんが国会議員になり、階段をスロープにした時にも、同じような声があったように思う。

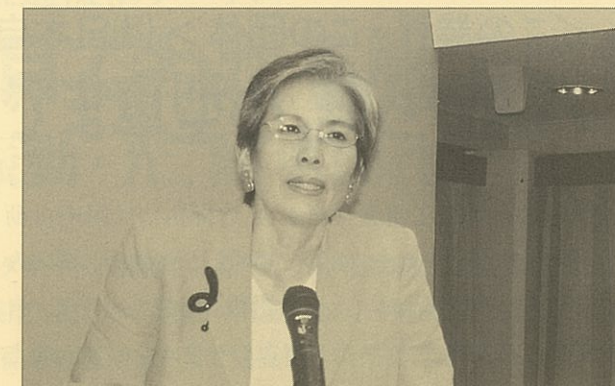
一番の問題は、「違いがあること」を日本は認めないことである。社会全体で「違いはない」にしたいのだ。しかし、現実には違いはある。障害のある人もいるのだと「存在」を認めた方が、本当はより優しい気持ちが出るはずなのに、それを覆い隠そうとする。私は、今の日本の諸悪の根元は「違いを認めないこと」だと思っている。

使う側が声を上げ、作る側と一緒に考えよう1

私は現在、道路関係4公団民営化推進委員を仰せつかっているが、決して「田舎に道路をつくるな」などと言っているわけではない。大都会と地方とを同じにしようという発想がおかしいと言っているだけだ。戦後の国家運営は「国土の均衡ある発展」の名のもとに、「結果の平等」を追い求めた。平等とは本来、入り口の権利や機会が平等であればいいのであって、それが自由主義社会なのだ。そうだとすれば、結果に差が出るのは当たり前のこと。結果に差があることを、差別や格差として問題にすること自体が問題なのである。

私は「違うからおもしろい」と思うし、お互いに

■声を上げることの重要性を力説する大宅映子さん



違いを認め合って、初めて相手を受け入れることができるかと信じている。

ユニバーサルデザインの究極の例は恐らく信号だろう。信号は世界中どこでも、「赤がストップ、青がゴー」。もし、これがユニバーサルではなく、「赤がゴー、青がストップ」だったら大変だ。しかし、それと同じようなおかしな事例が日本中、世界中にいくらかでも散見できる。例えば、水道の蛇口だ。栓を上げるのか、下げるのか、バラバラである。シャワーのシステムも何十種類もあり、ホテルなどではとまどうことがしばしばある。トイレも同様だ。

どうしてこうなるのか。理由の一端は、デザイナーや技術者にもある。というのは、彼らはどうしても他人と違うことをやりたがるからだ。これは職業的な性癖であり、一面で競争することの利点もあるから、仕方のない部分もある。

けれども、使う側からしたら、「そんなことは考えてくれなくていい」ときちんと言わなければいけない。今まではあきらめていたが、不便さをなくしていくためにも、個人が声を上げることが大事である。今、改革の必要性が盛んに叫ばれているが、私たち1人ひとり、企業1社1社が自分たちでやらない限り、改革など進むわけはなく、元気にもなれない。

共用品に関して言えば、まだまだ大きなビジネスチャンスが広がっている。なぜならば、今はまだ世の中かなりのバリアがあるからだ。本当に「みんなと一緒に考えよう」という機運が高まって初めて、真に豊かな、真に心地よい、真に暮らしやすい、本当の意味での便利な暮らし方を共有できる社会が形成できる。その意味でも、共用品推進機構が大きな働きをしてくださることを期待している。

<この業界・この団体> (社)日本自動車工業会 バスから軽、小型車まで「福祉車両」の普及めざす

日本自動車工業会（自工会、JAMA）は国内自動車・二輪車メーカー 14 社で組織し、自動車産業のみならず、産業界全体に大きな影響力を持つ。今年、自動車工業振興会を統合、「東京モーターショー」の主催団体となった。その「第 36 回東京モーターショー 2002 商用車」は 10 月 30 日（木）～ 11 月 3 日（日）に千葉・幕張メッセで開催される。

自工会では、安全性や省エネ対策、税制、道路整備、交通環境対策などについて、多角的な調査・研究、啓発、提言活動を展開している。その一環として、90 年代以降、超高齢社会をにらみ、「福祉車両」の普及に向けた取り組みに力を入れている。

具体的には、各社の担当者による企画部会福祉車両ワーキンググループが中心となり、福祉車両の販売状況を独自に集計・発表し、PR 冊子『ともに道をひらく』の作成・配布を通じて、福祉車両に対する理解と普及の促進にも努めているほか、日米欧の主要国における福祉車両に関する現状や優遇制度を調査、標準化などの課題の検討を続けている。

2001 年度販売台数は 3 万 3000 台

福祉車両は一般に、①体が不自由な人が自分で運転する「運転補助装置付き車」、②助手席回転シート、シートリフトアップ、③車いすやストレッチャーのまま乗乗できる車、④低床バス、ノンステップバスなどの大型車など高齢者・障害者の乗り降りが楽になる車両一



福祉車両の普及・啓発を目指して、年 2 万部を発行している冊子『ともに道をひらく～いるいるな場所に出かけよう～』の表紙

■(社)日本自動車工業会 (JAMA)

設立: 1967 年
会長: 宗国旨英 (むねくに・よしひで) 本田技研工業会長
本部: 〒100-0004 東京都千代田区大手町 1-6-1 大手町ビル
問い合わせ: TEL. 03-5219-6656 (調整担当) FAX. 03-3287-2073
ホームページ: <http://www.jama.or.jp>

一などに分類される。

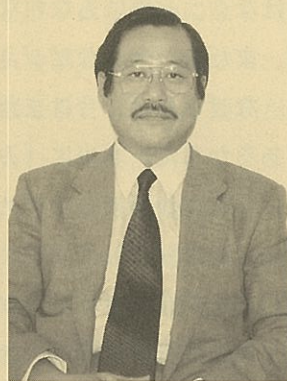
自工会によると、2001 年度の販売実績は、軽自動車 7880 台（前年度比 48.3% 増）、小型車 2 万 2206 台（同 7.0% 増）、バス 3698 台（同 26.1% 増）の合計 3 万 3784 台（同 16.5% 増）。国内総販売台数のいまだ 1% にも満たない数だが、調査が始まった 95 年度以来 2 ケタの伸びを維持している。

自工会では「日本の福祉車両は開発着手こそ遅かったが、装備の機能、技術力はすでに世界最先端を行く」（星野護氏）として、中国・アジア市場なども視野に入れ、一層の普及促進に取り組む考えだ。

<共用品・共用サービス促進会議委員からひと言>

中国・アジアにも有効な共用品コンセプト

星野護・JAMA 事務局調整担当次長兼企画・調整グループ長



福祉車両は主に「車いすの方が利用するクルマ」として開発が始まった専用だが、最近では、助手席回転シート車やシートリフトアップ車など誰にとっても便利な共用品的な装備が人気を集め、実際の販売台数を見ても、それらが全体の 3 分の 2 を占めている。

いずれも安全性の高さに加え、日本車ならではの「かゆい所に手が届く」きめ細かなモノ

作りのノウハウが注ぎ込まれており、世界最先端を行っていると自負している。「共用品」の考え方は素晴らしく、今後、日本以上のスピードで高齢化が進む中国・アジア諸国をはじめ国際的にも有効だろう。我々も輸出産業の立場から、他の業界とも協力を深めつつ、国際貢献に努力していきたいと思う。

(談)

特集 国際福祉機器展の共用品推進機構ブース 「配慮点」が一目でわかる展示に! 点字、触覚、音声、振動・光、簡単操作……

今月 10～12 日に東京・有明の東京ビッグサイトで開催された「第 29 回国際福祉機器展 (HCR)」で、共用品推進機構は新しい展示方式を採用した。4 年連続の出展となった今回は、「できるだけ多くの共用品を直接手に触れてもらう」という従来の展示をあえて見直し、「共用品とは何か」を効果的に訴えかけることに重点を置くディスプレイ型の展示に切り換えた。その基本的な考え方や狙いを、新たに展示した共用品の「ニューフェース」と共に紹介しよう。 (橋本 英和、高嶋 健夫)

新たに「4つの配慮区分」で共用品を分類

今回の展示に先立ち、8 月 10 日に今年度の「共用品選定委員会」が開かれた。今回も公募方式によって候補を探したが、合計 210 点が自薦・他薦され、選考の結果、そのうちの 180 点が共用品データベースに新たに掲載される運びとなった。これで、これまでに選定された共用品は約 450 点となった。

今回の選定作業では、8 ページの表に示した新しい分類方式を採用し、これに準じて候補商品の特性を点検・確認していった。

昨年までは「カタログ・取扱説明書」、「パッケージ」、「操作における表示」、「操作・操作反応」の 4 分類で区分していたが、製品の種別分類と機能別分類が混在していた嫌いがあり、また「操作反応」という表現がややわかりにくいという声もあったために見直すことにした。

今年度は、「わかりやすさへの配慮」、「アプローチしやすさへの配慮」、「扱いやすさへの配慮」、「その他の配慮」という 4 つの「配慮区分」を採用。さらに各区分ごとに 3 点ずつ、計 12 の「配慮ポイント」を示したうえで、具体的な配慮方法を例示することで、より機能性に近づく分類になっている。

9つの配慮点別に「興味がわく展示」

一方、HCR での展示方法についても、今年で 4 回目になることから、マンネリ化を避ける意味で見直しを行った。狙いはズバリ「配慮点が一目でわかる展示」である。

昨年までは、「より多くの人に、1 つでも多くの共用品を知ってもらいたい」という考え方から、限られたブースにできるだけ多くの共用品を並べ、しかも直接手に取れるような展示を心がけた。これに対して、今回はむしろ「配慮点」という共用品なら



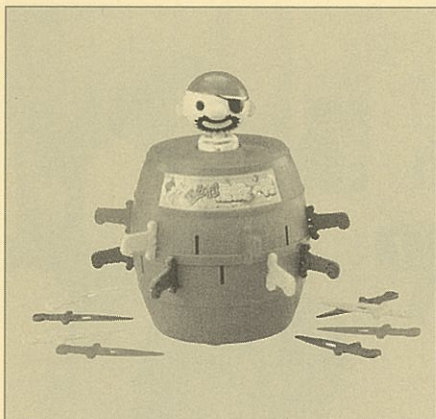
■配慮点が一目でわかる展示を目指した今年の共用品ブース。3 日間とも多数の見学者でにぎわった。

■共用品の配慮区分と配慮ポイント

配慮区分	配慮ポイント	配慮方法
わかりやすさへの配慮	複数の手段で情報提供	触覚(含む点字)、音声、振動、文字、光など、複数の手段で情報提供し、識別しやすいように配慮
	視覚・聴覚情報を強化	大きな文字やフォント、コントラスト、音量や周波数などで、類似のものと比較して身体特性の補完に配慮
	理解しやすい表現方法	わかりやすい文章・絵・図記号・色分け、ゆっくりの音声、他言語などで類似のものと比較して理解しやすいよう配慮
アプローチしやすさへの配慮	アプローチのための情報提供	触地図、案内表示、音声案内の充実などで、多様な人へアプローチ情報を提供
	移動のしやすさ	様々な人に配慮したエレベーター、スロープ、自動ドア、手すりなど移動支援の手段を用意している
扱いやすさへの配慮	使いやすい位置・配置	カウンターの高さ、操作盤や取り出し口の配置など接近性が類似のものと比較して利用しやすい
	容易な操作	片手、左利き、弱い力でも、器用さなどに配慮し、類似のものと比較して操作しやすい
	操作のフィードバック	わかりやすい操作感、報知音、表示などでフィードバックし、操作状況を確認できるように配慮
その他の配慮	自動化されている	類似のものと比較して複雑な操作を自動化・簡易化して、多様な人に利用しやすい
	新しい配慮	多様な人へ画期的な新しい価値を提供している
	多様な人への安全配慮	多様な人があることを前提に、情報、素材、機構、構造などで安全性を強化。非難時、事故災害時の非難誘導
	入手・利用しやすさへの配慮	多様な人を考慮した販売方法・利用システムを用意

ではの特徴を来場者に理解してもらうことに力点を置き、より目につきやすい展示を目指した。

このため、展示品目も約120点と、前年より30点ほど絞り込むことにした。展示に当たっては、前述の配慮区分とはやや異なるものの、代表的な配慮ポイントとして、①点字付き、②触ってわかる、③音声でわかる、④見やすい・理解しやすい、⑤動き・振動・光でわかる、⑥弱い力でOK、⑦片手・左手でOK、⑧操作が簡単、⑨その他の配慮——の9項目に振り分けて陳列した。



■トミー 「New 絶叫ジャンボ黒ひげ危機一発」

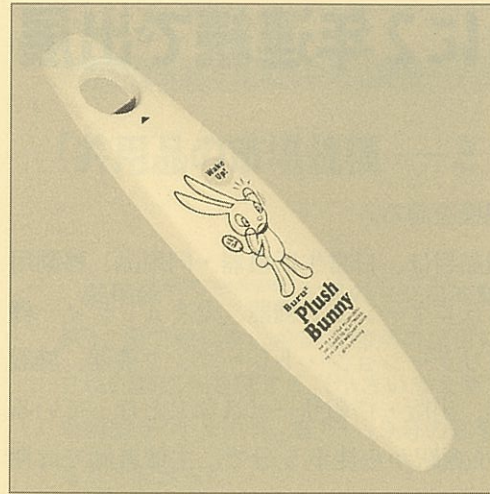
同時に、陳列棚も変更し、縦4段に積み重ねて、来場者に興味を持ってもらえるような「楽しさ」を演出する展示を心がけた。

このほか、ブース内には、共用品推進機構が日本児童教育振興財団の助成で制作した副読本『共用品って、何だろう?』や「ISO/IECガイド71」関連のパネルなども展示したほか、例年通り、調査報告書や書籍の展示販売も行った。

■枕の下に置く振動目覚まし、「据え置き型」のラップ

今回の展示で新たに共用品推進機構ブースの仲間に加わったニューフェイスをいくつかピックアップしてみよう。

「音声でわかる」共用品の1つが、おなじみの人気玩具のリバイバル版であるトミーの「New 絶叫ジャンボ黒ひげ危機一発」。一時市場から姿を消していたが、根強い人気でカムバック。剣を刺す度に黒ひげが何かをしゃべるようになり、視覚障害者などにはより反応がわかりやすくなると共に、「スリルも増した」と好評という。



■山文 「ブルブルフラッシュバニー」



■日立化成フィルテック 「ビューラップ5」

「動き・振動・光でわかる」の中で異彩を放っているのが、山文の「ブルブルフラッシュバニー」。振動機能付きの目覚まし時計なのだが、デザイン・形状も、使い方も独創的だ。前面パネルで起床時間をセットし、後は枕の下に入れる。すると、指定の時間が来ると、ブルブルと振動して、枕をゆらす仕組みだ。停止ボタンは穴の中にあるので、寝ている間に頭の重みで押ししてしまうような心配はないという。アラーム音との切り換えもできる。

日立化成フィルテックの「スライドカッター式ビューラップ5」(シャンボサイズ)は、「操作が簡単な家庭用ラップフィルム。中のフィルムを詰め替えないで済む「据え置き型」の容器に、スライド式のカッターが付いていて、フィルムを引き出し、つまみをスライドさせれば、片手で自由な長さに切れる。子供や高齢者でも安全に使えるように、カッター部は容器本体に内蔵させてある。

トアスの「トアスエクセル」は、「アプローチし

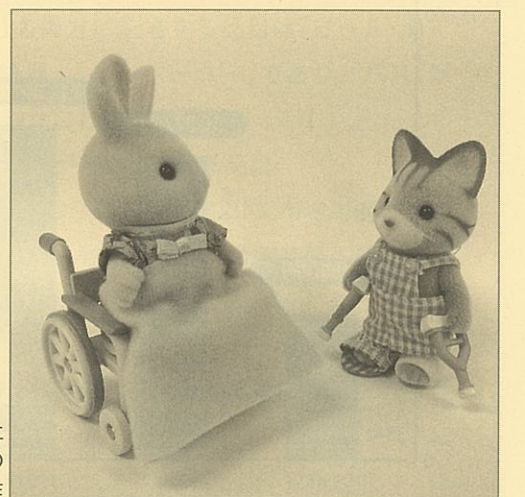
やすさへの配慮」に分類された、デザイン的に工夫した手押し台車だ。ものに乗せる荷台の位置を高くして、作業に伴う身体への負担を軽くする構造になっている。使わない時は、荷台が真ん中から左右に折れ、ハンドルも折り畳めるので省スペースで済むのもユニーク。ぎっくり腰の予防になりそうだ。

このほか、ワンタッチできれいに開封できる封筒「ボスラーく」(ウイル・コーポレーション)、取っ手に体重をかけて体の横で押していける杖代わりのキャリアバッグ「イーゼースワニー」(スワニー)など、今回は全般に独創的な共用品が増えている。今後の共用品開発に一石を投じる動きとも言えるかも知れない。

最後に番外編を紹介しよう。ジオラマ玩具の代表格であるエポック社の「シルバニアファミリー」シリーズに、片足を怪我して、車いすに乗ったり、松葉杖をついたりすることができるセットが加わり、HCRの共用品ブースでも人気を集めていた。



■トアス 「トアスエクセル」



■エポック社 「シルバニアファミリー」の新作

「第4回西日本国際福祉機器展」に2年連続で出展 11月21～23日、北九州市で開催

共用品推進機構は11月21(木)～23日(土)の3日間、北九州市西日本総合展示場新館(小倉区)で開催される「PPC2002 第4回西日本国際福祉機器展」(主催・西日本国際福祉機器展実行委員会)に出展する。昨年に続いて2年連続の参加で、展示内容は東京での国際福祉機器展(HCR)に準拠した内容を予定している。

同展は九州経済産業局、福岡県、北九州市、北九州商工会議所、(財)西日本産業貿易見本市協会など九州政財界の共催によるもので、福祉・介護機器分野の専門展示会としては、HCR、バリアフリー大阪な

どと並ぶ規模を誇る。

主な出品品目は、日常生活機器・同用品、移動用機器、コミュニケーション機器、セキュリティー機器、リハビリテーション・トレーニング機器、施設用大型機器、出版・情報サービスなどとなっている。会場はJR小倉駅から徒歩5分で、主催者側では期間中、4万人以上の来場を見込んでいる。

(高嶋 健夫)

■ホームページ

<http://www.nishiten.or.jp/fukushi/02/index.htm>

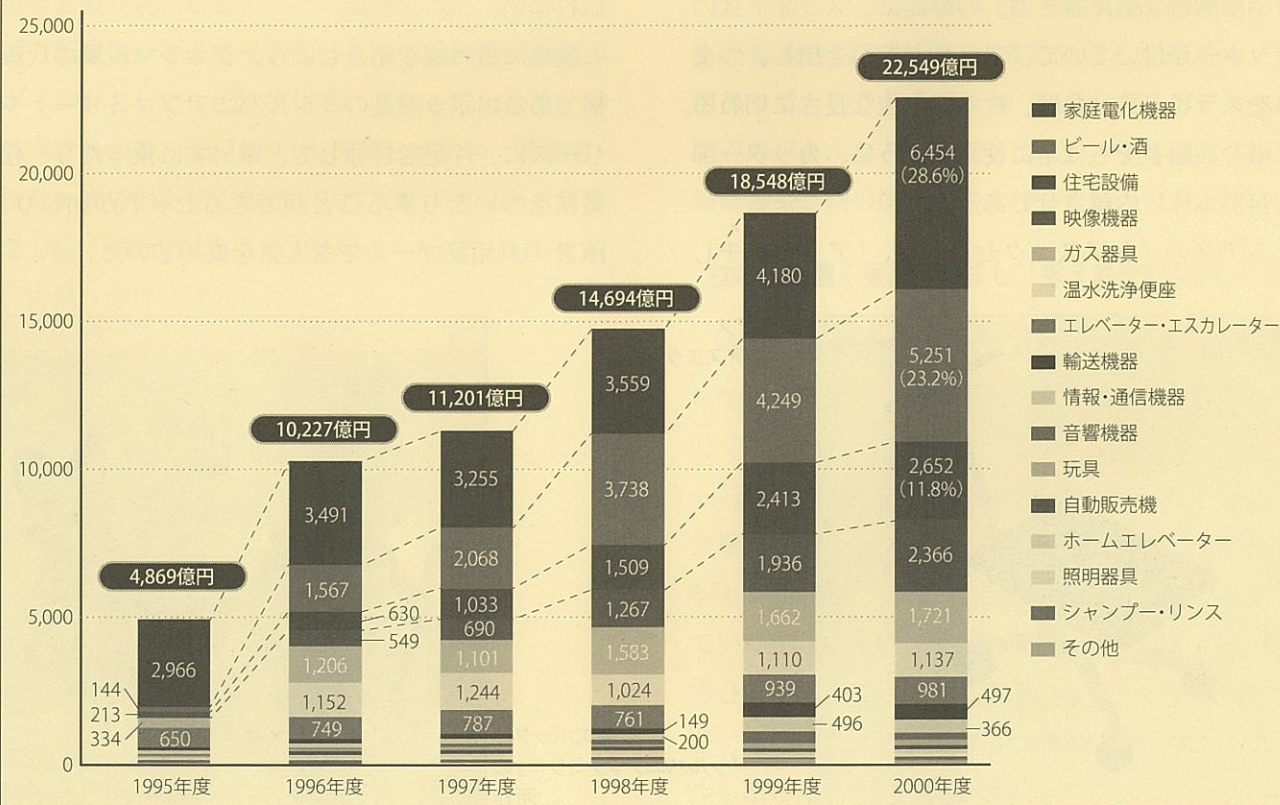
《訂正とお詫び》

5月25日発行の『インクル』第18号の「特集・2000年度共用品市場規模調査」記事の中で、5ページに掲載した「図表2 共用品市場規模の推移」のグラフに誤りがありました。

誤りは、①グラフ右側に示した主要品目の凡例の順序が間違っていること、②1999年度以前の各グラフの「ビール・酒」と「家庭電化機器」とが入れ違っていること——の2点です。

以下に再掲した図が正しいものです。同調査をご活用の際は、訂正・差し替えてくださいますようお願い申し上げます。ご迷惑をおかけした皆様には謹んでお詫び申し上げます。

■共用品市場規模の推移(単位:億円)



「共用品の市場規模——ミクロ的動向」

後藤 芳一 (個人賛助会員、日本福祉大学兼任講師)

共用品^{③⑤⑩⑬⑭⑯⑰⑱}市場のマクロ的動向について第12講で触れた。今回は個別の品目に注目し、ミクロ的動向を整理する。(小さい添え字^{①～⑯}は、同様の用語が「インクル」第1～19号の本欄に既出であることを示す)。

1. 基礎的な情報(その1:現在の姿)

2000年度時点の姿は、次のとおりである。

(1) 市場規模の大きさ

共用品全体の市場規模は2兆2549億円である。代表的な品目は大きい順に、「家庭電化機器」^{⑤⑧～⑬⑯⑰}は6454億円、「ビール・酒」^{⑦⑱}は5251億円、「住宅設備」^{⑤～⑧⑬⑱}は2652億円、「映像機器」^⑱は2366億円、「ガス器具」^⑱は1721億円、「温水洗浄便座」^{⑤⑬⑱}は1137億円、「エレベーター」^{②⑤⑨⑫⑱}は958億円、「情報・通信機器」^{②⑦⑱}は366億円、「音響機器」^{⑤⑧⑬⑱}は275億円、「乗用車(座席シフト)」^{⑨⑬⑱}は249億円、「バス(低床)」^{③⑤⑨⑬⑱}は248億円、「玩具」^{⑥⑦⑯⑱}は205億円である。

(2) 共用品の占めるシェア

品目別に見た共用品のシェア(金額ベース、出荷分に対するフローのシェア)は大きい順に、「ビール・酒」は69.2%、「ガス器具」は52.4%、「エレベーター」は36.5%、「シャンプー」^{⑤～⑦⑬⑱}は36.2%、「家庭電化機器」は32.2%、「バス(低床)」は16.8%、「映像機器」は12.4%、「玩具」は6.7%、「エスカレーター」^{②⑨⑫⑱}は5.0%、「自動販売機」^{⑤⑦⑯⑱}は4.9%である。

2. 基礎的な情報(その2:最近の変化)

1996年度から2000年度までの変化は、次のとおりである。

(1) 市場規模の伸び率(年率)

共用品全体の市場規模の伸び率は21.9%である。品目別・金額ベースでは大きい順に、「乗用車(座席シフト)」は129.3%、「ビール・酒」は35.3%、「玩具」

は25.0%、「家庭電化機器」は16.6%、「バス(低床)」は11.7%、「エレベーター」は7.4%、「自動販売機」は3.9%である。

瞬間値としては「鉄道車両(円滑化基準対応)」^⑩が5193両(2001年)から7435両(2002年)へ43.2%伸びている(国土交通省調べ)。

(2) 共用品のシェアの伸び

品目別のシェアの伸びを大きい順に見ると、「ビール・酒」は20.3%から69.2%へ48.9ポイント伸び、同様に「ガス器具」は26.4ポイント、「家庭電化機器」は18.5ポイント、「バス(低床)」は15.7ポイント、「エレベーター」は13.8ポイント、「映像機器」は10.0ポイント、「玩具」は5.4ポイント伸びている。

3. 市場規模の動向に特徴のある品目

(1) 現在の主要品目

2000年度時点の市場規模とシェアが共に大きい品目は、「ビール・酒」、「ガス器具」、「家庭電化機器」、「エレベーター」、「映像機器」であり、「バス(低床)」と「玩具」がこれに続く。

(2) 成長の大きい品目

最近(1996～2000年度)の市場規模の伸びとシェアの伸びが共に大きい品目は、「ビール・酒」、「家庭電化機器」、「バス(低床)」、「エレベーター」であり、「玩具」がこれに続く。

(3) 伸びも量も大きい品目

(1)と(2)の両方に該当する品目は「ビール・酒」、「家庭電化機器」、「エレベーター」であり、「バス(低床)」と「玩具」がこれに続く。

(4) 特殊な要因が作用している品目

「シャンプー」は95～96年度以降、市場規模とシェアとも減少した。省資源化のため詰め替え式が普及し、容器の新規需要が減少したことによる。

(注)注記のない数値は、(財)共用品推進機構^{①④⑥⑩⑫⑬⑱}調べ。

翻訳絵本『スーザンはね……』、評論社から刊行

9月25日に、評論社の「児童図書館・絵本の部屋」から、翻訳絵本の『スーザンはね……』が発行されます。

出版のきっかけは、昨年の夏にまでさかのぼります。昨年8月、共用品推進機構の星川安之専務理事が、ISOの会議に出席するために英国に行った時のこと。会議の合間に、英国の街角のとある書店で、シーソーに乗って微笑む女の子の絵本を見つけました。

「いい本、見つけた!」

星川さんは本屋の片隅で、主人公の天真爛漫さとトニー・ロス氏の魅力溢れるイラストに心惹きこまれ、思わず購入。女の子は大きなトランクに詰め込まれ、飛行機に乗ってはるばる日本にやってきたのです。

帰国後、成田から事務局に直帰した星川さんが、絵本が好きな私に向かって開口一番発した言葉が「いい本、見つけたよ!」でした。

「どれどれ?」とワクワクしていると、「トランクに入れて自宅に送っちゃったから明日ね」。思い切り肩透かしにあった私は、次の日が来るのを、心待ちにしました。

次の日、朝一番に手渡された英国の本は10冊以上もありましたが、やはり、真っ先に目に飛び込んできたのは、シーソーに乗って微笑む女の子の絵本『Susan Laughs』でした。

日本の子供たちにも見せたい

スーザンは、どこにでもいるような女の子です。笑ったり、歌ったり、泣いたり、怒ったり、いい子かと思ったら、急にいたずらっ子になったり、とても忙しくしています。

だけど、いつでもどこの場面でも、自分らしく生きいきと過ごしているのです。

自分は自分らしく、ありのままにしていることの尊



■『スーザンはね……』

ジーン・ウイリス ぶん
トニー・ロス え
もりかわ みわ やく
発行：評論社
価格：1300円(税別)
9月25日初版発行

さと、彼女らしさを大切に育もうとしている周りの人々の温かさを伝えてくれるこの絵本を、日本の子供たちや大人の人たちにも読んでほしい、それなら翻訳しよう。原書を読み終えた時に、そう強く思いました。

そして、評論社の方にご相談したところ、最終的に同社から翻訳出版していただけることになりました。この間、多くの人たちに助言を得ながら翻訳を進め、何度も何度も編集者の方とやり取りをして、ようやく刊行の運びとなりました。

翻訳など全く経験のない私に対して、評論社の竹下純子さん、吉村弘幸さんには大変お世話になりました。また、陰ながら翻訳本ができていくのを応援して下さった方々にも心からお礼を申し上げます。

1人でも多くの方々が、『スーザンはね……』を手にして下されば、嬉しいです。(森川 美和)

ドラえもんが案内する交通バリアフリー

小冊子『みんなの駅』、共用品推進機構が協力

国土交通省は子供たちに向けた小冊子『みんなの駅 きみにもできる交通バリアフリー』を発行した。

同省は、平成12(2000)年に施行された「交通バリアフリー法」の「心のバリアフリー」の推進を目的に、同13(2001)年度より「交通バリアフリー教室」を全国10カ所で開催、駅での介助体験、疑似体験を行ってきた。大人の参加を予想していたところ、「総合的学習の時間」の導入とも重なり、小・中学生の参加も多く、講習も活気あふれるものとなった。

しかし、教室でのテキストは、「交通バリアフリー介助マニュアル」という一般向けのもののみであったことから今回、子供たちに親しみのある「ドラえもん」が登場する子供向けのマニュアルの作成を計画、共用品推進機構が協力させていただいた。

冊子は、B5版・24ページ・オールカラー印刷。担当部局は、同省総合政策局交通消費者行政課。内容は、①駅交通機関で障害のある人、高齢者が不便を感じていることの紹介、②交通バリアフリー法の

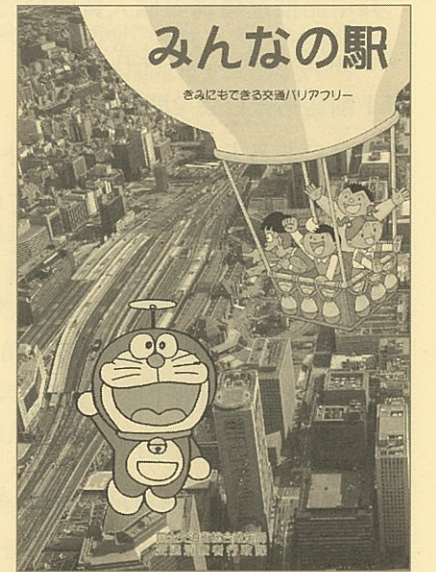
具体策の紹介、③困っている人がいた時の声のかけ方、伝え方、案内・誘導の仕方の一例を紹介、④あなたの駅・ホーム・車内チェック——といった流れでできて

おり、イラストを多用し、ポイントごとのメッセージをドラえもんが伝えている。

国土交通省では、交通バリアフリー教室以外にも「総合的な学習などで役立ててほしい」と、近く全国の市町村教育委員会への配布を計画している。

(星川 安之)

■国土交通省ホームページ：<http://www.mlit.go.jp>



『ロービジョンのための生活便利帳』を刊行

視覚障害者のための大活字書籍を発行している大活字(市橋正光社長)は、『ロービジョンのための生活便利帳～見えにくい・見えなくなってきた人へ～』を刊行した。

弱視者問題研究会、中途視覚障害者の復職を考える会(タートルの会)、日本網膜色素変性症協会の共同編集によるもので、障害者手帳の申請方法、補装具・日常生活用具の交付方法に始まり、行政や交通機関などの各種支援サービス、教育、職業訓練など様々な情報を網羅している。

B5判・212ページ・横組みで、弱視者にも見や

すいとされる22ポイント・ゴチック体で組まれている。価格は1500円(税別)。ほかに、テキストデータを収録したFD版もあり、価格は1000円(同)。

また、弱視者が電子メールを始める時のための入門書『見えにくい人の初めてのEメール』(三宅洋信著)も刊行した。「Outlook Express編」と「MMメール編」があり、いずれもB5判、22ポイント・ゴチック体で印刷されており、CD-ROM付きで、価格は2980円(同)。

(高嶋 健夫)

■問い合わせ先：大活字(株) TEL：03-5282-4361

FAX：03-5282-4362

●ニュース & トピックス

共用品ネット

「共用品ネット報告会：2002」を開催

10月19日に、代々木・国立五輪記念青少年総合センターで

共用品推進機構の個人賛助会員有志で組織する「共用品ネット」(永井武志代表)が10月19日に第1回活動報告会を開催する。

前身であるE & Cプロジェクトが財団化した時より「東京会議」として活動していたグループが、昨年10月に名称を「共用品ネット」(財団共用品推進機構 個人賛助会員の会)と改め、新たな組織として活動を続けている。この共用品ネットが初めての活動報告会を開催する。共用品・共用サービスに関心のある方は誰でも自由に参加できるオープンスタイルをとり、多くの方々の参加を期待している。

開催日時は、10月19日(土)午後1時30分～4時25分。場所は、国立オリンピック記念青少年総合センターのセンター棟1階101会議室。小田急線参宮橋駅下車、地下鉄千代田線代々木公園駅下車。新宿駅、渋谷駅から京王帝都バスもある。

当日のイベントは次の通りとなっている。

◎各プロジェクトとシーズ坦克の活動報告

- ・駅および電車内の電光表示板の利用状況(特に非常時)に関する調査
- ・片麻痺についての考察
- ・タクタイル(浮き出し)文字の開発
- ・通常時と非常時の案内誘導音声の指針作成
- ・カードシステム(電子投票など)の調査
- ・包装商品の識別と開封
- ・利用しやすいバスのあり方
- ・高齢者の余暇生活調査
- ・シーズ坦克(プロジェクトの芽)アイデア発表

◎手話コーラスタイム

◎バリアフリービデオ上映

◎プロジェクトパネルコーナーで話し合うコミュニケーションタイム (小塚 通宏)

■問い合わせ先：共用品ネット・永井武志代表(株)プラナ内) TEL:03-3381-7161 FAX:03-3381-7239 E-mail:HHG01573@nifty.com

●ニュース & トピックス

共用品推進機構

普及キャンペーン、第8弾はホテル、第9弾はクルマ

小学館の全面協力を得て展開している連続キャンペーン広告の第8弾、第9弾が『週刊ポスト』と『女性セブン』に掲載された。第8回のテーマは「ホテルのバリアフリー」。利用されるお客様に快適に過ごしていただくために、心の触れ合いを大切に考えていきたいとしている。掲載号は『ポスト』が8月9日号、『セブン』が同8日号。

続く第9回は「福祉車両は暮らしのサポーター」。新車を購入する際には、同乗する人にも利用しやすくなるよう、必要な装備については相談して下さいと訴える内容。掲載号は『ポスト』が9月6日号、『セブン』が同12日号 (森川 美和)



共用品通信

【セミナー・イベント】

○共用品ビジネス実践講座
共用品推進機構主催の初の連続講座(全6回)で、第1回は10月18日。受講料、日程などは事務局まで。

【新製品・サービス】

○「商品と暮らしの花王ボイスガイド2002年版」発行
定評ある声のカタログで、DAISY版CDになって今回で第4版。申し込みは花王広報センター社会関連グループ TEL:03-3660-7057、FAX:03-3660-7994 E-mail:kouho@kao.co.jp

【共用品・共用サービス促進会議の動き】

○第7回促進会議(7月10日)
各分科会の運営・テーマなどについての意見を出し合った。

○不便さ分科会(7月29日)
「不便さ予備調査」結果を見ながら、商品・施設の集約を検討した。

○展示会分科会(8月6日)
各業界の主要展示会での共用品コーナーの設置に向けて、基本コンセプトと展示パネルについて検討。

○データベース分科会(8月16日)
今回は初会合。リーダーを選任。

【高齢者・障害者配慮設計指針関連 ISO、JISの動き】

○「高齢者・障害者配慮JIS」アンケートを実施へ
経済産業省標準課が所管する「高齢者・障害者配慮JIS」体系化のために、主な業界団体・工業会、高齢者・障害者団体を含む消費者団体を対象にアンケート調査することになり、作成作業が行われている。

○ガイド71ワーキンググループ(WG)会合(7月19日)
「ガイド71」のJIS化に向け、第2回サブWGと第1回WGで大筋の合意と今後の日程が確認された。

【関連機関・団体の動き】

○人間生活工学研究センター(HQL)、「高齢者IT特性データ」について機構と意見交換(8月6日)
HQLの石本明生氏より昨年度に行った「高齢者のIT対応特性データ収集」結果の説明を受け、今後の分析テーマや展開策について討議。

【政府・国会・自治体の動き】

○「ユニバーサル社会に関する勉強会」に星川氏が講話(7月9日)
野田聖子・自民党衆議院議員を議長、浜四津敏子・公明党代表代理議員を副議長とする与党3党有志の勉強会で、今年3月に発足。星川事務局長が招かれ、共用品

について約30分講話。

○郵政事業庁 機関誌『施設・情報』で、東京・中野郵便局を取材
UD特集の2回目として、聴覚障害者の郵便局の利用に関して取材。聴覚障害者の専門誌『いくおーる』編集部的小川光彦さん、トミー共用品推進室の牧内智子さんらが参加。

【報道・トピックス】

○共同通信が「共用品」関連特集記事を配信
8月13日より、全国紙・地方紙に順次掲載。機構にも早速、読者から反応。京都の中学校の校長先生からの問い合わせに対して、『共用品って何?』の副読本を送付、人権の授業に使われることになった。

【共用品推進機構の動き】

○第8回運営委員会(7月17日)
企業向け講座、共用サービスの基準策定、『共用品白書2002』に関して討議。共用サービスの基準は既存サービスをまず調査することに。

○共用品選定委員会(8月10日)
平成14年度の選定委員会を実施。公募方式による約210点の候補から、180点をデータベースに掲載することになった。

【来訪・来所】

○韓国・障害者福祉研究所のキム・ジョンヨル所長らスタッフ5名(7月8日)
在韓日本大使館に紹介された障害者団体関係者が来所。韓国での共用品の普及推進に向けて意見交換。
○日本盲人社会福祉協議会(日盲社協)出版部会(7月25日)
日盲社協では点字表記の標準化のためのアンケートを実施、ガイドラインを作成した。その後に企業書を作成、方向性を話し合った。

＜読者の皆様へのお願い＞

『インクル』では、共用品・共用サービスに関連する幅広い情報をより多く、よりタイムリーにご紹介する「共用品通信・情報アラカルト」を新設いたしました。新製品・新サービス、セミナー・講演・展示会、モニター募集などのほか、「個人・法人賛助会員からのお知らせ」も掲載する予定です。

つきましては、事務局「インクル編集担当宛て」に、ニュースリリース、イベント案内などの情報をお寄せいただけますよう、お願い申し上げます。メールでも歓迎です。
jimukyoku@kyoyohin.org

情報・アラカルト



事務局長だより

韓国、岩手、大阪、東京…… 共用品展示会、準備は着々

ほしかわ やすゆき
星川 安之

☆…「8月までは準備期間。9月から多くの事業が動き出す」が、共用品推進機構の設立後3年間のパターンになっている。

今年も、9月に東京ビッグサイトでの国際福祉機器展、10月に韓国・光州、11月に岩手県立県盲学校と展示会が続き、他にも大阪のATCエイジレスセンターでの展示、東京・猿楽町の機構事務局での常設展示のリニューアルも予定している。

それらに向けて、8月10日、今年度の「共用品選定委員会」が開かれた。公募方式によって新たに210点が推薦され、そのうち180点が共用品データベースに新規掲載されることになった。これで、今まで選定された共用品は約450点。今後、これらの中から、テーマや対象などに応じて、いろいろな展示会に出展されていくことになる。

☆…韓国・光州^{クワンジュ}では、10月17～22日の6日間、日本貿易振興会(JETRO)主催の「日韓交流祭」に出展する。この展示会も今回が3回目、そして最終となる。1回目は日本の共用品を展示、2回目は韓国コーナーも併設し、韓国製の側面に

ギザギザの付いたシャンプー容器、点字でビールと表示された缶とびんのビール、ONスイッチに凸表示の付いた炊飯器などを展示した。

そして、今回。展示会が終わった後も、日韓で協力体制をとりながら共用品を推進できる基礎づくりをと考えている。手始めに、昨年11月に釜山^{プサン}で開いた2回目の展示会に出展して下さった韓国企業・業界団体に再度コンタクトをとり、共用品への関心度をうかがった。「大変興味があるが、どのように進めていったらよいか問題」というのが、共通したコメントだった。

一方、障害者・高齢者関連の団体はどうかと、在韓日本大使館に問い合わせたところ、「障害者権利研究所」が適任ではないかと紹介された。早速、今年5月にソウル市にある同研究所のキム・ジョンヨル所長をたずね、共用品に関して情報・意見交換を行った。7月にも、アジアの障害者団体の会合に出席するため来日された際に、職員数名と共に共用品推進機構に寄っていただき、さらなる意見交換を行った。

2回の話し合いの結果、まずは、

☆☆☆

韓国の障害者・高齢者団体と、各種業界団体・企業で話し合いを行うことになった。本号が印刷に回っている頃には、初会合が開かれている予定である。

☆…国内でも、「共用品の原点を常に大切にしていきたい」との思いで、草の根的な各地での展示会を再開する。今年はず、11月に岩手県立盲学校。同校は「障害について知ってもらおう」と市民との交流にも積極的なことで知られ、関係者との準備期間中のコミュニケーションも含め、成果がとても楽しみである。

最後は、機構事務局での常設展示のリニューアル。基本をしっかりと伝えると共に、テーマ別の企画展示などをうまくミックスさせ、見学者に常に有意義な内容にしていきたいと考えている。そして、ATCエイジレスセンター (<http://www.ageless.gr.jp/>)のご協力で、今後1年間、大阪・南港にある同センターにも共用品を常設展示するスペースをいただくこととなった。これにより、西日本の方にも共用品を実際に手に取る機会が増えることを期待している。

どこかの展示で共用品を見かけて下さったら、どうか「もっとこうしたら」といったご感想、アドバイスをいただきたいと思う。 (★)

作る人と使う人の共用品情報誌

インクル 第20号

2002(平成14)年9月25日発行

"Incl." vol.4 no.20

©The Kyoyo-Hin Foundation, 2002

隔月刊、奇数月に発行

一般頒価 1部 1000円

(但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています)

※視覚障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはTXTファイルのフロッピーディスクを提供しています。必要の方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行 (財)共用品推進機構

郵便番号 101-0064

東京都千代田区猿楽町2-5-4 OGAビル2F

電話 : 03-5280-0020

ファクス : 03-5280-2373

Eメール : jimukyoku@kyoyohin.org

ホームページURL : <http://kyoyohin.org/>

発行人 鴨志田厚子

事務局 星川 安之

万代 善久

森川 美和

橋本 英和

金丸 淳子

編集長 高嶋 健夫

執筆・協力 小塚 通宏

後藤 芳一

嶋田実名子

中野奈津美

牧内 智子

山本百合子

制作 日経BPクリエイティブ

印刷・製本 光写真印刷株式会社

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、(財)共用品推進機構までご連絡ください。

上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。